

1 総合評価

中期目標・中期計画に掲げた4つの事業（収集・保存、調査・研究、展示・プレゼンテーション、研修）の令和7年度活動に対する検証及び評価の結果は以下のとおり。

収集・保存についてはB、調査・研究はB、展示・プレゼンテーションはA、研修はAとなった。

以下は、中期目標に対して実施された令和7年度の活動について、自己評価結果の検証および施設見学などを通じた多角的な視点から整理したものである。

（1）総評

○ 風化・世代交代への的確な対応と体制の充実

震災から15年が経過し、記憶の風化や社会の世代交代という重大な課題に直面する中、伝承館はこれらに正面から向き合い、変化し続ける復興の状況や新たな知見を柔軟に取り入れながら、情報を発信し続ける拠点として運営体制を確実に充実させている。

○ 社会的認知度および発信力の向上

上記の取組は、「入場者数の増加」や「メディア等における紹介実績の拡大」という具体的な成果として表れており、着実な進捗が認められる。また、外国人来訪者への多言語対応を通じた国際的な発信力は大きな強みであると評価できる。

○ 展示の充実

第4・5ゾーンにおける展示内容の見直しを行うとともに、差し替え可能な展示パネルや企画展を活用し、展示内容を柔軟に更新できる体制が構築されている。展示・プレゼンテーションに対するスタッフの士気が高く、期待を上回る展示のブラッシュアップが見られた。今後は、博物館登録を契機とした県外出張展示の充実などに取り組んでほしい。

○ 研修の充実

フィールドワークの提供や語り部の技術向上・育成などの点で意欲的に取り組み、来館者にとってここでしか得られない貴重な体験の機会となっており、引き続きこれらの取組に関する効果的な情報発信を行うことで、更なる誘客につながることを期待される。また、英語による研修プログラムや、語り部セッションにおけるオンライン翻訳ツールの活用は多言語対応の優れた実践例であると評価できる。総じて「研修」は高いレベルの内容が随所に見られたが、重要指標である一般研修実施回数が目標未達のため、福島県復興祈念公園と連携した新たな研修プログラムの策定・展開など更なる充実を期待する。

○ 来館者数の実績

いずれの事業においても精力的に事業展開を図られており、その成果の一つとして来館者数の実績に表れている。令和7年度の来館者数（有料エリア）は、92,601人（うち外国人5,025人）であり、令和6年度から6,050人増加して開館以来2番目の来館者数となった。また、教育旅行による入館状況は、延べ314校、19,175人で過去最高となっている。

(2) 今後の取組に必要な視点

○ 災害から時間が経過していく中での資料の収集・保存、収蔵場所の確保【収集、保存】

帰還困難区域内では家屋解体などの動きもあり、資料の収集・保存は時間の経過とともに難しくなる。このため、自治体等との信頼関係を構築し、資料の背景や思いなど、その価値を見極めて収集していくことが必要である。

一方で、収蔵庫の容量は全国的な課題でもあり、直ぐに成果に結びつけることは難しいが、資料の収蔵場所の確保に向けて丁寧かつ計画的に取り組んでいくことが必要である。

○ 若手研究者の育成とキャリアパスの確立、F-REIとの連携強化【調査・研究】

伝承館は、世界的にも類を見ない「複合災害の研究」と「展示を通じた伝承」を融合させた極めてユニークな機能を有しており、社会情勢などが変化する中でも展示内容を工夫されている点は評価できる。この強みを最大限に活かすため、特に若手研究者に対する活動支援及びキャリアアップを促すための体制整備をさらに強化するとともに、研究者が自身の研究成果を発表し、意見交換やネットワーク形成を行う機会をさらに充実させることで、次世代の人材育成に寄与することが期待される。

また、F-REIとの共同事業を通じ、調査・研究活動により精力的に取り組まれることが期待される。

さらには、当施設が国内外の研究者、実務者、市民をつなぐ交流と学びの拠点としての役割をさらに強化することで、将来の災害リスク低減や復興政策にも大きく貢献していくことが期待される。

○ 展示を通じた複合災害の問いかけ、災害経験の多様性をさらに反映した展示の充実【展示・プレゼンテーション】

伝承館は、福島県が直面した複合災害の事実を来館者に問いかけ、考えてもらい、行動に移してもらうという重要な役割を担っている。そのため、展示内容の更新を続けていくとともに、来館者が展示等を見て感じたことに対してフォローするような取組みも大切である。

また、帰還した人々と帰還を選択しなかった人々の声、風評被害の影響を受けやすい女性や子供（現在も展示に含まれている）、風評被害を受け続けている漁業者や農業者、さらには福島県産品の購入を控えた首都圏などの消費者の視点も含めるなど、展示のさらなる充実が期待される。

○ 語り部活動の安定的かつ継続的な実施【研修】

語り部の活動は着実に定着しつつあるが、今後も安定的かつ継続的に実施していくためには、館職員と語り部、さらには語り部同士が適宜交流や情報交換を行える環境づくりが重要である。

語り部が活動への意欲を持続できるよう、引き続き配慮と工夫を重ねていくことが望まれる。

(3) 今後の事業の推進に向けて

○ 「調査・研究」と「展示・研修」の循環（サイクル）の確立

調査・研究部門と展示・研修部門とのさらなる連携強化が不可欠である。研究成果を迅速に展示へと反映させ、同時に来訪者から得られた感想や反響（フィードバック）を次なる研究活動に活かすという、相互に高め合う「循環型サイクル」の構築を強く推進されたい。

○ デジタルアーカイブ化の推進と情報発信機能の充実

これまで収集・蓄積してきた資料データベースの更新や展示内容のデジタルアーカイブ化を強力に推進されたい。

これらを「知見データベース」として体系化し、広く社会へ向けて効果的に発信・提供できる情報基盤の機能を充実させることが、伝承活動の高度化において重要である。

○ 地域社会・経済への貢献（まちづくりとの連動）

来場者の増加を単なる施設内の成果に留めず、交流人口の拡大や震災ツーリズム産業（ホープツーリズム）の強化へと波及させ、最終的には地域の「まちづくり」に寄与・貢献する役割を担うべく、本年5月に開園した福島県復興祈念公園、伝承館周辺の企業や施設と連携の上、「情報発信拠点」として戦略的な施策と実行・推進力を発揮できる体制が重要である。

（４）意見

○ 事業全体の進む方向性

誘客して何を伝えたいのか、どのような社会にしていきたいのかが大切である。来館人数だけで評価するのではなく、予算をどのように使って、それが県の復興にどう寄与しているのか示せる評価軸を行政と対話して検討した方が良い。

事業の予算規模をどのように考え、この地域の少なくとも数十年先の未来をどう考えるから、何をやらなければならないのか、という思考と計画がもっと目に見えるとよい。

事業全体の進む方向性などの内容をどこで考え、外部からの意見を収集し、それらに対して長期的に誰が責任を持って対応していくのか、その「もがき」が伝承館をさらに発展させるものである。

○ 伝承館が果たすべき役割に応じた人員体制の強化

昨年度から今年度にかけては、震災発災15年という節目の年で県内外での関心が高い時期であるが、今後、時間の経過とともに関心が薄れることも想定される中で伝承館が果たすべき役割は益々増大すると考えられる。必要性を分析した上ではあるものの、その役割に応じた人員体制の強化を検討するべきである。

○ 「知の拠点」「地の拠点」としての存在

福島の複合災害は、「終わっていない災害」であり、地球規模で人間が向き合い、解決しなければならない災害である。放射能による風評や流言飛語など、人の心が生み出す被害も、「災害の時、人はどうあるべきか？」を考える大切な課題である。伝承館は、この課題を世界に問い、その答えを考える場所といえる。世代を越え地域を越えて、入館者が増加していることは、まさにその成果といえる。「知の拠点」であると同時に「地の拠点」として存在していかなければならない。

2 事業（4分野）別評価

中期計画の各年度の達成状況を事業単位ごとに評定
(二次評価の合計について、評価した人数で除す)

○評価基準（次に置き換える）

- ・S：大変評価できる（4.5 以上）
- ・A：評価できる（3.5 以上）
- ・B：おおむね評価できる（2.5 以上）【標準】
- ・C：あまり評価できない（1.5 以上）
- ・D：評価できない（1.0 以上）

※端数処理：小数点第2位を切り捨て

評価事業単位	評価	各委員コメント
収集・保存	B	○ 現段階での資料や情報の収集についての限界や課題がある中での現状は理解できる。保存に関しては、今後の効率化や規模拡大化が課題であろう。(今村委員) ○ 可能であれば、将来的にデジタルアーカイブをオンライン上で一般公開することを強く推奨する。 また、多言語対応のインターフェースや検索機能が整備されれば、海外の研究者や教育関係者、来館者にとっての利便性と価値がさらに高まる。 こうした取組には時間や人的・財政的資源が必要であることは十分理解しているが、長期的な発展に向けた重要な方向性であると考えている。(ユリア委員) ○ 新聞社との連携協定に基づく資料収集のほか、家屋解体が開始された双葉町内の帰還困難区域を対象とする資料収集に着手するなど、順調に行われている。 資料データベースの更新は、不具合の改修が行われたため、入力作業に遅れが生じていると思われるが、引き続き適切に行われることを期待する。(吉田委員) ○ 様々な情報やものが保管されていることに感銘を受けた。 その一方で、伝承館が対象としている時間的空間的な領域がどこなのか、見えづらい印象を受けた。原発事故から15年が経ちその当時に中心的な役割を担っていた方が年をとり、あと10年もすれば多くが天寿を全うされるような時期にさしかかっている。そのような情報をどのように引き継いだり収集したりするのか、どんどん情報が消えていっている中、それに対する焦りも必要のように感じる。人の声や思いみたいなものを一斉に集めるようなことが必要かもしれない。(坪倉委員)

	○ 積極的な資料収集を行っており、アーカイブ施設としての機能を十全に果たしていると言える。今後は、保管の際のカビ対策や、万一の災害時に備えたデジタルアーカイブ化などを進めるための、予算的裏付けに期待したい。(前川委員) ○ “モノ”だけでなく、無形である人々の記憶を“証言”という形で収集され、当時の生きた人々の経験を記録化し、内容の分析・体系化までを計画的な実施等に取り組まれていることを評価したい。その際、“当時を生きた記憶”という事実的側面だけでなく、現在から当時の経験をどのように認識し価値づけ物語っているかという観点で分析することも重要だと考える。 今後はそれらを「展示・プレゼンテーション」に繋げていく計画も高く評価するとともに、効果的な展示がなされることや「研修」にも生かしていくことを期待したい。(大林委員) ○ 資料の収集について、帰還困難区域の民家等の調査を実施した他、被災体験の証言含め、重要な資料収集を適切に進めることができている点等、評価できる。 資料の利活用については、資料閲覧室の移動後の整備を行い、新たにエントランスホールに書棚を設けるなど、利便性を高めた開架へ向けた準備を進めることができた。 また、パネル・写真・資料等について、他団体への貸出も積極的に行い、活用と周知に努めた点等も、評価できる。 県および地域が置かれている現状についての理解を深めてもらうために、今後も館では資料の利活用を進め、来館者および館外への情報提供に期待したい。(田邊委員) ○ 量より質を重視することも大切と考える。例えば重点的に収集するテーマを決めるなど資料収集の複数年の計画をたて、取り組むと評価しやすくなり、計画的に他者を巻き込むこともできると思う。 博物館登録が進み、全国科学博物館協議会にも加盟されると聞いているので、ますますの活躍に期待する。(筑波委員) ○ 帰還困難区域において建物の解体作業が進められており、役場等と連携して計画的に調査・資料収集を進めていくことが求められる。また、当時の貴重な報道資料を持つ県内新聞社（２社）と連携協定を締結したことは非常に意義深く、今後に向けて報道資料の収集と資料整理の方針検討をお願いしたい。 また、収蔵庫の保管スペースを確保するための方策を予め検討していく必要がある。(平岩委員) ○ 限られた町の資料になっているので、郡内アーカイブとの連携を期待したい。証言映像や語り部の動画は、時間の経過とともに変化、深化するので、時代ごとに「伝えたいテーマ」を整理して保存していくべき。(青木委員)
--	---

調査・研究	B ○ 個別の研究課題が多く、各分野および展示企画等との連携が見られない。一方で、学術研究集会の定期開催は、原子力災害関係を議論・報告する重要な場になっていることは評価できる。(今村委員) ○ 研究チームには多様な専門分野の研究者が所属していることから、今後は支援体制をさらに充実させることも検討できるかもしれない。例えば、リサーチ・アドミニストレーターを増員や、各研究者が自身の専門分野に応じた助言を受けられる仕組み、さらには外部の研究者や大学教員によるメンタリング制度の導入などが考えられる。このような体制は研究面での支援だけでなく、研究者が将来のキャリア形成に必要な人的ネットワークを構築する上でも大きな助けとなる。 同様の理由から、研究成果を学会や研究会などで定期的に発表する機会を積極的に設けることも重要であると考ええる。理想的には年に2回程度の発表機会を確保することで、完成した研究成果を発信するだけでなく、多様な専門分野の研究者から意見や助言を得ることができ、学際的な交流や研究の発展につながることを期待される。(ユリア委員) ○ 各研究者による研究およびアウトリーチ活動は順調に行われており、学術研究集会の参加者、発表者とも前年度を上回った点は評価される。 クロスアポイントメント制度や専門業務型裁量労働制の導入により、研究環境の向上が図られた点は評価される。他方、過重労働の防止や従業員の健康維持の観点から、各研究員の勤務時間の把握は適切に実施されたい。 F-R E I との共同事業によるさらなる調査・研究の深化を期待する。(吉田委員) ○ F-R E I や浜通りに入っている地元を含む多くの大学機関、国の研究機関、民間で行っているものなど、様々な研究がこの地域には入り乱れている。そのような様々なものがある中で、伝承館だからできること、伝承館という母体だからできる調査や研究が何か、それがまだ見えてはいないと思う。特に伝承という立場からは、今の復興がどうかではなく、15年前の状況がどうであったのか、昔の情報をもっと研究や調査の対象にしないといけないと感じる。(坪倉委員) ○ 上級研究員および研究員の調査研究は、十分に行われている。今後、県外や海外の研究者とのネットワーク強化を進めてほしい。(前川委員) ○ クロスアポイントメントやF-REI との共同研究など、研究者ネットワークの構築等も含め計画的に実施されていることを評価したい。 今後は、伝承館での研究者が伝承館から他機関に異動して研究を行う者も排出していくことになると考えられるが、彼らも含めたネットワーキングのハブとしての役割を伝承館が果たすことを期待したい。 伝承館の今後の発展にも外部資金獲得は重要であることから、今後は間接経費を戦略的に活用し、次の外部資金獲得につなげられるサイクルの確立が望まれる。(大林委員)
-------	---

		○ 博物館としての調査・研究は、基本的に資料から始まるが、伝承館では研究が先にあるように思うので、このあたりの調査・研究については、よく連携をとって成果を共有してほしいと思う。 また、研究成果をアーカイブする仕組みや、研究成果を企画展（あるいはテーマ展など小規模な展示）として継続的に実施できると良いと思う。研究者は展示をつくることは得意ではないと聞くので、お互いの得意を活かした活動につながることを期待する。（筑波委員） ○ 研究員による1人当たりの学術論文等発表数は9件となっており、精力的に研究活動が行われている。研究部門のPRについては、来館者向けも充実させるとともに、伝承館における調査・研究により今後、さらなる知見の集積や人材の確保につながるよう効果的な情報発信を期待している。（平岩委員） ○ 研究テーマは「コミュニケーション」「子どもの発達」「社会貢献」など、地域の復興に直接結びつくものであるが、実際には地域との関わりが限られている。研究成果の周知、開放、共有が必要。研究者の研究テーマや実績を地域の人が知る機会が少ないので、研究が研究室で終わらない事を望む。（青木委員）
展示・プレゼンテーション	A	○ 開館から5年が経過する中で、内容の体系や来訪者の関心やニーズに沿った工夫も見られる。エントランスでは、地域や関係機関との連携の展示や活動・イベントが見られ評価できる。（今村委員） ○ 多言語対応の充実についても高く評価したいと思う。英語による展示解説や、多言語でデジタル情報へアクセスできる仕組みは、海外からの来館者が増加する中で非常に重要かつ必要な取組である。一方で、館内のインターネット接続が必ずしも安定していないことや、利用可能なタブレット端末の数に限りがあることは課題として残されている。今後、アクセシビリティをさらに向上させるために、タブレット端末へ音声読み上げ機能や音声認識・翻訳アプリを標準搭載し、語り部との交流やガイドとのコミュニケーションにも活用できるようにすることが考えられる。 全体として、女性や子育て世代の視点がより多く取り上げられることも期待される。特に風評被害や食品安全に関する問題については、こうした層が大きな関心や不安を抱えてきた経緯があり、その経験や考え方を展示の中でより可視化することには大きな意義がある。（ユリア委員） ○ 展示の時点修正や補修のほか、第4・5ゾーンにおける展示内容の見直しについて、適切に実施されている。 また、国内外の要人に対する視察対応や出張展示に関して精力的に行われた点は高く評価される。 今後は、外国人来訪者への多言語対応のほか、ゾーンごとのテーマと各展示との結びつきがより明瞭になるよう工夫されることに期待する。（吉田委員）

	○ 非常に難しいと思うが、何を伝承したいのか、実際に放射線被ばくによる住民の健康影響は大きくないという話をしづらい状況なのも理解できるが、実際にそうであった一方で、「避難や生活環境変化のダメージが大きかった」という国連の報告など様々な機関で既にいわれているようなことについて、伝承館が及び腰になっていると、健康問題の仕事をしている人間からは映る。それが批判につながるため、厳しいということはわかるので、だからこそでは何を伝承したいのか、についてももう少し議論があっても良いように感じた。そのためには今の人員では圧倒的に人が不足していると感じる。そういったことを考えて調べて、工夫をするための人材が余裕を持って存在する必要があるように感じる。(坪倉委員) ○ 定期的な展示更新や、第4ゾーンのマグネットパネル活用、多彩なエントランス展示など、工夫が凝らされている。展示内容のブラッシュアップに、職員が積極的に関わっているのは素晴らしいことだと感じる。「自分たちの施設」として職員のみなさんが能動的に活躍できる環境をこれからも維持してほしい。(前川委員) ○ 常設展の展示内容の見直し（特に「未来のまち」コンテンツの見直しの具体的な検討）、多数の国内外の要人等への発信、年間を通じ大阪・関西万博等のイベント等も踏まえた企画展示の実施、計画を上回る館外展示の実施などについて高く評価できるものである。今後は復興祈念公園や隣接するホテル等と連携した効果的な取組を一層期待したい。(大林委員) ○ 常設展示について、開館から5年が経過し、新しい情報を取り込む必要があるコーナーについては、更新しやすい仕組みを取り入れ、速やかに展示に反映できるよう改修した点等、評価できる。 新設した第5ゾーンの来館者からの「教訓」を募集するコーナーでは、実際に被災された方や、他の地域から見学に来て展示等を見て感じたことなど、様々な立場の方の意見を集め、共有することができており、新たな取組を行った点も評価できる。今後も記録として蓄積されることに期待する。 館内の企画展示以外に、館外展示（出張展示）も国内各地にて積極的に行い、館の認知度向上および活動内容の周知に努めた点は、高く評価できる。 イベント事業等では、地域に向けた内容も多数取り扱い、地域に根差した取組が行えている点も評価できる。引き続き、双葉町および周辺市町村の地域に住む人々が足を運びやすい環境を作る取組も一定数行い、関係性を深めることに期待する。(田邊委員) ○ 更新し続ける施設はあまりないので大変だが、強みになると思う。 展示を内外にアピールすることも大切だが、教育効果を意識してほしいと思う。多くの学校が訪れていることもあるので、展示を受動的な姿勢で見せるだけではなく、能動的に（考えながら）見学できる仕掛けを検討してほしいと思う。展示を更新することを目的とせず、展示を更新することで教育的な効果を上げることを目的にしてほしいと思う。(筑波委員)
--	--

		○ 来館者から「教訓・未来へ残したいメッセージ」を募集し、来館者が感じた災害への教訓を展示されていた。ホームページなどでこれらのメッセージを掲載することにより、防災・減災の観点からも効果的な情報発信につながっていくと考える。(平岩委員) ○ エントランスでの企画展示が、テーマの設定、展示物の内容共に充実していた。展示のアテンドは、研修を定期的実施することで、心技ともにレベルアップを図ることができる。(青木委員)
研修	A	○ 一般研修および専門研修の参加数増加や多様性、さらに内容の充実が見られる。語り部講話の評判も高い。(今村委員) ○ 英語による研修プログラムが新たに導入されたことは高く評価したいと思う。海外の企業や大学などの団体であれば通訳を手配することも可能だが、個人旅行者や海外からの一般来館者にとって、地域の方々と直接対話できる機会は非常に貴重である。こうした交流は、原子力災害が個人の人生にどのような影響を与えたのかを理解する上で大きな意義を持つだけでなく、風評や偏見を乗り越え、来館者自身が災害や復興について主体的に考えるきっかけにもなると考える。(ユリア委員) ○ 学校団体や企業等を対象とした研修プログラムを通年で提供し、参加者から高い満足度を得ている。また、中間貯蔵施設も含めたフィールドワークや、学芸員と巡る特別フィールドワークなど、意欲的に取り組まれており、高く評価される。 語り部の技術向上や育成に関しても適切に進められており、来館者からの満足度を維持している点は、高く評価される。(吉田委員) ○ 研修も他の3事業と本質的なところは変わらないように思う。研修についてもこれまで非常に良くなされていると思った。今後30年なりを見据えた際に、「何のために研修するのか」について共有されるとなると良いと感じている。(坪倉委員) ○ 語り部講話を中心に参加者の満足度の高さがうかがわれる。ただし、最も重要な指標である一般研修の実施回数が目標達成率84.6%にとどまっており、団体数・人数とも令和5、6年度を下回っている。研修実施回数の減少の背景に何があるのか、具体的なデータに基づき検証が必要である。その上で、今後の研修の実施方針や目標数値について再検討してほしい(場合によっては、今後、研修事業の「選択と集中」が必要になる可能性もあるのでは)。(前川委員) ○ 一般研修・専門研修や語り部講話などについて高評価・満足度の高い研修等を実施されていること、外部組織とも連携しつつ中間貯蔵施設等を巡る新たな研修プログラムの開発を行うなど、伝承館が単なる収集・保存や調査研究に留まらず、本来の存在意義である「伝える」ということにフォーカスし、ソフト面で意欲的な取組を行っていることは高評価に値する。 今後、時間の経過とともに関心が薄れることも想定される中で、伝承館

		が果たすべき役割は益々増大する。最終的に県内外での発信に必要となるのはマンパワーであることから、研修ニーズや現在の職員の稼働率を踏まえた上で人員の追加を検討すべきだと考える。その際、全体として効果・効率的な予算執行は前提であるものの、ニーズが比較的高いタイミングで「伝える」活動を行うことの重要性に鑑み、必要な経費については、追加的な予算措置を行うべきである。（大林委員） ○ 一般研修、専門研修、語り部講話等、いずれも質の高い研修を実施できている。 近年、博物館施設等に求められているインバウンド対応およびインクルーシブ対応を踏まえ、英語版の整備や手話通訳を付けた語り部講話の実施など、多様な利用者への配慮を行った点は高く評価できる。（田邊委員） ○ 研修を通じて、どのような人を育てたいのか、どのような地域にしていきたいのが基本だと思う。 回数が評価でなく、実施したことによる効果を図るべきだと思う。特に回数は水物であり、広報すれば回数を確保できるかもしれないが、皆さんの説明を聞いたうえで、研修の本質は実施した回数ではないと感じているところ。（筑波委員） ○ 新規の研修プログラムとして中間貯蔵施設を巡る個人向けフィールドワークが新設された。これは、中間貯蔵施設が抱える課題の理解を深める上で非常に意義がある取組である。今後も事業者である環境省などの関係機関と連携を密にして、必要に応じてフィールドワークの検証を行い、原子力災害が抱える課題とりわけ中間貯蔵事業の理解促進を図っていただくよう尽力願いたい。 本年５月に開園した復興祈念公園や伝承館周辺の企業や施設と連携したホープツーリズムの充実を図ることにより、交流人口がさらに拡大することを大いに期待している。（平岩委員） ○ 一般研修の講話は、「聴いて知る」「知って考える」ことで伝承館での学びを整理できる貴重な時間になっている。 語り部の時間（「体験語り部の講話」と「一般研修の語り部講話」）を設定していることは福島県の伝承館の魅力である。 手話の語り部（聾者、手話通訳者）を入れることで、情報保障の徹底が図れた。福島県聴覚障害者協会と連携して通訳者の派遣ができるようになったので、イベントとしてではなく、定期的に手話で講話が伝わるようにする。（青木委員）
--	--	--